

<はじめに>

私はぐうたら村での研修に参加するまで、環境を守る＝ゴミの量を減らすように意識する、ぐらいの感覚しかなかった。SDGsは知っているけどなぜ今こまで言われているのか、深いところまでは意識が及んでいなかった。さらには環境問題と保育は全く別のもの、という捉え方さえしていたような気がする。実際にぐうたら村での研修に参加させてもらうと、豊かな環境で出会える様々な動物や虫、生活の知恵、心から綺麗だ、すごいと思うことのできる景色に出会うことができた。言葉ではうまく伝えるのが難しいが私が感じたこの思いを、子どもたちに届けたいと強く感じた。そして、子どもたちの心が動く楽しい実践をしたいと思い関わってきた。

<私が考えたいいのち真ん中の教育>

- ・子どもたちが環境を大切にし、自ら守っていかうとする態度を育てる
- ・これからの地球を生きていく子どもたちの生きる力を育むこと

<これらを育むために、幼稚園教諭として私にできることは？ 手立て>

- ・あくまで子どもたちが主体的に取り組めることを実践する。
- ・子どもたちが自分で考えている間は口出ししない、提案もしない。
(大人の力を必要とした時、状況の整理が必要な場面ではもちろん積極的に関わる)
- ・子どもたちの記憶にどう残るのかを大切にする。未来に繋がる実践にする。

事例1 「みんなで虫の食べた葉っぱ探し!!」

7月のぐうたら村研修が終わった後、私が撮影してきたたくさんの写真を子どもたちに見せ、楽しかったことや面白かったことなどを共有することにした。その際に見せた、虫が葉っぱを食べた写真がある子の中に強く残っていたようだった。外へ出ると、「これ虫が食べた跡だよね」と保育者へ見せに来た。それをきっかけにクラスみんなで虫の食べた葉っぱを探す遊びが始まった。このことから、いつもは意識していなかったことだが、1つものを見る視点が増えると、いつもと同じ景色が違って見えてくるのだと感じた。



事例2 「畑の中見てみたいね」

みんなで虫食いの葉っぱを探していると、畑の中にいる虫のことが気になってきた。「ここ掘りたい」と話していたが、ここはみんなの畑だから掘るのはやめたい、と子どもたちへ伝えた。すると、「じゃあ自分たちの畑を作ろうよ!!」ということになりやる気を見せ始めた。アスレチックの下の小さなスペースを借りて、「ももぐみのはたけ」を作ることにする。暑い日が続く中での作業だったが、子どもたちは諦めることなく何往復も砂を運んだ。やりたい!と思うことへ向かう時の子どもたちは、自分たちで考えなんでもやってみようとする姿が見られた。



ミミズは畑の土をいい土にしてくれるということを知っていたので、自分たちが作った畑にもひたすらミミズや畑で見つけた虫を移動させてくることにした。次の日にはいなくなってしまうので、毎日虫を見つけてきては畑に入れるというのを繰り返していた。虫は「畑」が好きだから、絶対に来るはずなんだ!!と信じている様



事例3 「なんか生えないと虫は来ないんじゃない？」

毎日虫を探しては畑に入れるという繰り返して、「なんで虫逃げていくんだろうね」と聞いてみると「なんか生えてないと虫って来ないんじゃない?」と言う子が出てきた。「確かに!」「そうかもしれん」とみんなも納得して、何か植えようということになる。何がいいかな?と考えていると、前にみんなで見たことがあるビーツと、「ぐうたら村で先生が食べたいちご」と言ってくれたので、ワイルドストロベリーを植えてみることにする。この時の子どもたちは、虫が来るために何かを植えるという意識が強かった。



事例4 「なんで芽が出ないんだろう？」

自分たちの畑に種を植えて芽が出るのを楽しみに待っていたが、雑草もたくさん生えてくるのでどれが芽でどれが雑草なのかがよく分からない様子だった。「みんなはどんな芽が生えてくるのか知ってるの？」と尋ねてみると「分かん」「調べてみる」と検索したり雑草の本を見たりして調べ始めた。芽の形を知ると、明らかに違うものは抜いたり、小さな容器に入れて芽が出てくるか試してみようとする姿も見られた。畑でベリーが育ったらみんなで食べようね、ジュースにしようね、など想像が膨らんでくる。この時ぐらいから、虫が来るための畑という気持ちよりもたくさん芽が出る畑にしたいという気持ちの方が大きくなってきているように感じた。



事例5 「芽が出る方法教えてもらった？」

「先生また今度ぐうたら村行ってみるよ」という発言がきっかけで「じゃあその時にどうやったら芽が出るか聞いておいてよ」と子どもたちから思いを託されぐうたら村に向かった。その時の話を聞くのをとても楽しみにしていたようで、朝から「今日はぐうたら村の話？」とワクワクしていた。「あの畑で育てるなら、もっとたくさん土を運ばないといけないらしいよ」と言うと「たくさんってどのくらい？」と質問をするMちゃん。「みんなの膝くらいまでかな」と保育者が言うと、「わかった!!」と言い、みんなで土をたくさん運び始める。芽が出てほしいという気持ちが強いんだろうなと言うのが伝わってきた。



事例6 これってなんのために作るの？



←の写真を見て、「これってなんのために作るの？」という疑問を持ったMちゃん。子どもたちは想像しながら話し始める。「人が入るためならいらない」ということで話は終わった。しかし、大切にしている畑にたくさんの水やりをして、土が雪崩のように落ちてくるのがあった。その時に「ここになんか壁があったらこうならないよね」と話す。「あ!そのためにあの柵作ったんじゃない?それだったらここにもいるやん」と気づく。みんなでバイオネストを作る計画が始まる。



事例7 これ絶対に違うけん抜いていい？

いろんなことへの興味が湧いてきて、草への興味など寄り道をしながらバイオネスト作りに向かっていった。そんな時、Mちゃんが大切に育てていた芽（おそらく雑草だが本人はワイルドストロベリーだと思って大切にしていた）を見て、「これ抜いていい？絶対に違うけん」と言い出したDくん。「嫌だ」というMちゃん。何度かそのやりとりを繰り返していたので、一旦抜くのは保留にしてもらって、色々調べてみることにした。その結果、「やっぱり違うかも」ということに気づいた。Mちゃんは「抜いていいよ」とDくんに伝えたが、それからこの畑には来なくなってしまった。嫌になったわけではなく、ショックというのが大きかったのかなと思った。そこで、みんなでなんのために畑を作っていたのかを思い出せるように問いかけ、計画を練ってみることにした。

できたらいいな、ほんとうのジュースやさんごっこ計画

いつごろ開く？ さくらぐみ（年長）になったとき

どんなお店？ すむーじーやさん（Mちゃんのママみたいな）

そのために必要なことは？

- ・スムージーになりそうななんか育てる
- ・畑をいい土にする
- ・畑に栄養をたくさんあげる
- ・お水あげたりする

この話し合いの中で気づいたこと

**果物によって植える時期が違う
収穫できる時期も違う！！**

この話し合いで、やる気が出てきたのと共に植物を育てることはとても時間がかかることや、難しいことも知った。それでも、「本当のお店屋さん楽しそう!!」とみんなが前向きな気持ちになれたことを感じた。そこで、「冬にできることってなんだろう？」をみんなで考えて、今やれることを頑張ることに決めた。



いろんな子どもたちが楽しくやる気を出していると、Mちゃんも「やっぱりやりたい」と畑に戻ってくる姿が見られた。目的をもう一度しっかり振り返ることで、前向きな気持ちになれたのではないだろうかと思っている。年中組の子どもたちだけではなく、満3歳児の子どもたちも興味深く見に来て、「やってもいい？」と真剣に真似をする姿も印象的だった。何をしたい方がいいかは分からないけど、何かをしたい!という思いも強かったので、畑に詳しい先生に自分たちで「やることある？」と聞きに行く姿も主体性を感じた。

<今回の実践について>

「ジュース屋さんをやりたい!」という強い思いはあるが、みんなが作ったあの畑でたくさんの人が買いにくることができるような量のジュースができるのか...という不安はある。同じ時期に自分たちの考える果物がならないということはなんとなく理解している子どもたちが、悲しくなりすぎないようにしたいという思いと、できないという現実をそのまま受け入れることも大切なのか...と思う気持ちと半々なのが正直なところ。でも、子どもたちの畑を大切にす気持ちや丁寧に扱おうとする気持ちは確かに前よりも重たく（ずっしりした言葉に変わっている）なっているような感じがするのは、主体的に環境を大切にしようとする態度に繋がってくるのではないかと考えている。



**この自動販売機ができれば、
みんなで作ったジュースを入れて
本当に出てくるようにしたい**

<最後に>

本園は都会にあるわけでもなく、園の中にも畑があり日頃から虫や植物に親しめる環境は存在している。最初はそんな中で、子どもたちに「いのちまんなか」を伝えるためにはどういうことをしたらいいんだろう...という迷いしかなかった。そこで考えたのが子どもたちに写真を共有するという事。子どもたちは想像以上に興味を持って、「自分たちもやってみたい」「もっとたくさんの虫が来てほしい」という思いを保育者に伝えてくれたり、「先生が楽しかったことをやってみたい」と話してくれることが多かった。そのたくさんの思いが今回の実践の始まりになっていたので、環境、自然が子どもたちへもたらす魅力はとても大きいものだと思えて感じる事ができた。また、自分たちが一生懸命耕しても、水をあげても芽が出てこないというのは初めての経験だった。植物が育つのに時間がかかると知った時、「確かに大根植えたときも時間かかったね」と思い出す姿も見られた。畑を「自然」と分けて考えるのではなく「環境」の一部として考えることで、私たちが日頃から意識している保育と同じように考えることができ、難しいという思いも全くなかった。新たに知ったことが自分たちの過去の経験に結びつく、その繰り返しで未来に繋がる生きる力は育まれていくのではないかと、私は思っている。